

檜山兄弟 (一)





吉川英治文庫25

檜山兄弟(-)

Printed in Japan

©吉川文子 1976

(文2)

昭和51年11月1日 第1刷発行

著 者 吉 川 英 治

編 集 株式会社 六興出版内
吉川英治文庫刊行会

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽 2—12—21

振 替 東 京 8—3 9 3 0

電話東京03(945)1111(大代表)

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はお取りかえいたします)

檜山兄弟(一)



目次

長崎の巻

檜
山
兄
弟
(一)

長崎の巻

やくぎ仲間

一

やくぎ仲間

7

西が吹いて、その夕方が、丁度満潮まんちょうというころなどは、むせぶような海の香が町中はおろか、店の中、部屋の中まで、ひたひたと浸しみこんでくる長崎の町だった。

——いや、潮気しおけどころか、稀たまには、大きな海鳥うみどりまでが、宵明りの軒を掠かすめたり、人の混む露店の灯のなかへ、白い糞ふんを降らしたりする程、海と陸と、異邦人と日本人と、やくぎ者と勉強家と、綺麗きれな女と、汚い女と、あらゆるものが雑居ざつぎよ的に、混色している長崎だった。

「——もし、お客さん」

番台を飛び下りた、かささぎ湯の亭主なのである。

よほど、慌あわてたにちがいがなかった。女湯の土間から、下駄ぞうりと草履とを片ちんばに突かけた勢いで、

「もし待っとくんない。——お師匠さん」と息をはずませた。

その手は、今、のれんを割って、外へ出たばかりの、背の高い女の袂を、少しふるえながら握っていた。

「——あら、わたし？」と、女は、静かな瞳を向けた。

くわえていた手拭の端で、髪のうらをそっと拭いた。濡れ色の髪の根から、匂わしい汗が、湯上がりの白粉をうかしている。

「へ。……ちよっと、その」

「なんですか」

「伺いたいことがありますので」

「だから、どうしたの」

「おそれいます、もう一度、戻っていただきたく存じますが」

「おかしいね、この人は」

と、女は、夕顔のように、白く笑って、

「用があるなら、ここで、いったらいいじゃありませんか」

「でも、往来では」

「往来ではいえない用なの。妙なことをいう人だね。いったい、何がどうしたっていうんですか」

「実は、その、なんなので……」

と、亭主は、女のきびしい眼ざしに、やや自分の信念を疑い出したように、いかにも気の弱

い、ドギマギした言葉つきで、

「実は、紛失^{なぐな}り物がありまして。——へい。やっぱり、女湯のお客様で、たった今」

「だから、それが、私だということですか」

「——と、申すわけではございませんが」

「だって、止めるからには、はつきりと、疑っているんでしょう。冗談もほどにしてください。人を、馬鹿にして！」

急に、肩^{かた}を上げた語尾^{ごび}が、女の唇を、蒼白く、震^{ふる}わして走った。

「きつと、私を、板^{いた}の間稼^{まかせ}ぎだと言いましたね」

「いえ、け、決してそうは」

「ではなぜ、往来中で、人の袂^{たもと}なんか掴^{つか}むんです。見ッともない。——私はね、初めてこの銭湯へ来た客じゃありませんよ。お前さんだって知ってるでしょうが。すぐこの裏通りの、油町に住んでいる師匠です。これでも立派に、月琴^{げつしん}の師匠をして、結構、表構えを張っている御園慶子^{みそのけいこ}でございますからね」

「ぞ、存じております。……ですが、中には、あなた様を、知らない人もありますから」

「いったい、誰がいうんですか。そんなことを」

「お客様のなかで、たしかに、見たというお方がありました」

「私が、何か、盗^とったッて」

「困りましたな。何せい、客衆^{きやくしゆう}が、こんな風に騒いでしまったものですから」

「まあ」と、慶子は、大きな眸^{ひとみ}をして、

「じゃ、その人に、突き合わせて下さい。何を盗られたっていうのか知らないけれど、もう一度、すっかり着物を脱いで、大勢の中で見てもらいますから。だが、そうまでしても、もし私でなかった時には……」と、強い眼と、片^{かた}髷^{えくぼ}とで、じつと、相手にダメを押しながら、
「——かさぎ湯の御亭主さん。立派な、良^{おと}人のある私を、お前さん、どうしてくれる気なんですか」

二

女湯の中では、騒^{さわ}いでいた。

「盗^{かん}られたのは、簪^{かんざし}ですか。櫛^{くし}ですか」

「お金なんでございます」

と、盗難にあった女はしおれ返っていた。歯を、つやつやと、鉄漿^{かね}で染めた、四十がらみの、内儀^{ないぎ}だった。

「ま、お金ですか」

と、あわてて、肌をふいて、板の間に、紅絹^{もみ}や、縮緬^{ちりめん}や、紬^{つむぎ}や、いちどきに羽織^{はおり}って集まった女湯の客たちは、

「失礼ですが、どれくらい」

「きっかり、五両でございます」

「え、五両も」

「銭湯などへ、そんな大金を、持って来たのが悪かったんですけれど、帰りに払ってゆく取引の

船問屋が、すぐこの先の大工町だいこうちょうだったものですから」

「とんだ災難でございましたね」

「でも盗ったものは、分っているんでしょう」

「え、ま……」

「今、番台の御亭主が、追いかけて行きましたから、すぐ引っぱって来るでしょう」

湯けむりと、洗い粉と、白粉おしろいと、乳の匂いと、騒々しい饒舌じょうぜつとが、頭痛を催もよおす程ほどむれていた。

そこへ、入口の、しとみ障子が開いた。——そして、顔を硬こわばらした亭主が、今、湯から上がって外へ出たばかりの慶子を連れて戻って来た。

——あら、油町の、月琴げつきんのお師匠さんだ、と誰か呟つぶやいた。

蓋ふたをしたように、女湯の客たちは、饒舌じょうぜつをひそめてしまった。そして、盗られたもののシヨンボリとした顔と、疑われたものの落着いた微笑とを見まもり合った。

「あなた様でございますか。何か、ご災難に遭あったというのは」

丁寧に、しかし、わざとらしく、慶子は言った。

「はい……私で」

盗まれたものの声の方が却かえって顫ふるえていた。顔も、まっ蒼さおである。慶子の落着きぶりがやんわりと、圧伏する感じを与えていた。

「わたくしは、この表通りから二つ目の角の乾物屋かんぶつやをいたしておりますもので、はい、カネ芳と
いって、出島の異人屋敷へ、古くから穀類こくるい、乾物ものを納めております店の内儀でござい
ます
が」

「そんなことは、どちらでもようございますが……」

「でも、五両なんてお金を、盗られたと申しますと、嘘だと思われてはいけませんからね」

「どこでお失しなすったんですか」

「ここで」と、自分の着物を脱いでおいた戸棚を指した。

「外で、お落しになったんじゃないですか」

「いいえ！」と、カネ芳の内儀は、急に強く言いあがって、

「着物をぬぐ時だって、財布だけは、帯に巻いて、たしかに入れたくらいなんですからね」

「そうですか、——じゃそうとして、そのお金を、私が盗ったと言ったのは誰ですか」

「……………」

「どなたか、その手元を、見たというお方が、この中に、おありだそうですが」

「……………」

誰も、自分が、というものはなかった。

「ないんですか。……ほんとに、迷惑なのは私ですよ。良人のある身で、そんな汚名おめいを着せられては、このまま、家へは帰れませんからね。さ、どこでも、見てください。面倒くさい——」

きゅッと、帯を走らすと、着物も、長襦袢ながじゆばんも、肌晒布はださらしも、すべり次第に、足もとへ落して、ほ

とんど、一糸も余さない。

「……………」

みんな、気の小さい眼をして、彼女の乳くびと、二の腕を見つめた。

乳盤にゅうばんは、豊かな若さと、乳くびは、母になるべき近さを、うす黒く、象徴しやうちやうしていた。

それなのに——二の腕には、刺青の梅の花が一輪、その下に、「いのち」と仮名で刺ってあった。

三

「——あ、お慶め。また何か、やりやアがったぜ」

四ツ竹の安は、蕎麦を啜りながら、呟いた。

かささぎ湯とは、すぐ斜向うだった。藪忠という、江戸風なけんどん屋の店がまちに、安は、片あぐらをかいて、箸に、蕎麦をひっかけていた。

せいろの重ねてある簀窓の間から、往来は見通しである。慶子と番台の亭主とが、事ありげに、争っているのを見ると、安は、

「置いたぜ」と、小銭を鳴らして、立ちあがった。

安は、祭文語りだった。いや、祭文にはかぎらない、流行唄でも、よかばい節でも、唐人歌の九連環でも、追分でも、鞠歌でも、何でも、歌と名のつくものなら、四ツ竹の諧調にあわせて、やれないものはない。

寄席へは出ない。昼から、空地や橋のたもと、夜は、丸山の花街ときまっている。——だが、晩の丸山の流しは、稼ぎよりは、むしろ、道楽なので。

いや、道楽というよりも、病といった方が適切かも知れない。両の手に、四ツ竹を握って、喉を太くして、星を見て、一晩に一度は、あすこを、歌って歩いて来なければ、寝つかれないという安だった。

当人の自慢ばかりでなく、その四ツ竹は、名人芸に近いものである。大道芸には惜しいものだった。それにまた、ばかに、咳声のどがいい。

「はてな？」

蕎麦屋の暖簾のれんを首に巻いて、顔だけを、戸外へ出しながら、安は、往來を見まわしていた。

「——オヤ、また女湯へ戻って行つたぜ。ははあ、さては、お手際てぎわのところを、見つけられて、ばれちまったな」

月代さかやきは、枯れ野のように陽に焦やけているし、角かどばった顎骨おとがには、無精髭ぶしようひげが伸びているし……。

じろりと、白いのは、眼であつた。

空地の陽溜りひだまりで、いい喉で、四ツ竹にあわせて唄をうたっている時の安は、神さまみたいだとか誰かがいったが、こんな時に、人知れず、眉のあいだにちらとうごく凄味や、人の悪そうな鋭さは、神さまどころではない、人間のなかの人間、物騒な中でも物騒な男であるらしい。

「弱つたろう。ふ、ふ……」と、意味ありそうに、笑っていたのである。

「お客さま。お忘れ物が」

と、せいろを片づけた小女に注意されて、安は、あわてて、

「ほい、商売道具」と、受けとつた四ツ竹を、袂たもとに落した。

そして、独り語に、

「どれ、ひと風呂浴びてゆくか」

と、向う側へ、ついと、走った。

燕走りつばめばしに、男湯の前へ寄つた安は、かがみ腰に、覗のぞいて、

「——いけねえや、やけに、混んでやがる」と、そこを離れた。ほんの形だけに、覗いたまでのことである。

彼の眼はもう往来の人へのみ働いていた。その片足はすぐに、草履ぞうりを脱いで、捨て湯の流れている狭い溝の中へ入っていた。

足の拇指おゆびで、すばやく、濡れた財布をつまみ上げると、踵かかとの土でも拭くように、さっと手に移してふところへ。

そして、鼻唄である。

人を食った顔で——だが知りあいの者にでも会うと、無邪氣らしい、あいそ笑いを投げたりして、丸山の方へ、歩いていった。

すると、後ろから、彼の肩をつついた若い男があった。舶来縞はくらいじまの藍あいッぽい素衿すあわせに、色の小白いのがよく調和てんわっていた。遊び人差しの細いのを一本さして、

「飲もうか、安」と、笑いかけた。

「お、兄哥あにきか。奢ちかってくれるなら、どこでもいいぜ」

「ふざけるな」と、若い男は安を突っころばして、また笑った。

「俺の女房から、五両ばかり、手前てまえの手に行ってるはずだぞ」

四

「兄哥あにき知っていたのか」

「あたりめえよ」